

## 艾軒学派と江湖派詩人の研究

李, 祥

<https://doi.org/10.15017/1806781>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

(様式 3 )

氏 名 : 李 祥

論 文 名 : 艾軒学派と江湖派詩人の研究

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、従来重視されていなかった南宋理学派の一つである艾軒学派を取り上げ、その文学的源流と系譜、相互の影響関係、思想・文学の特徴を明らかにした上で、艾軒学派に属し、江湖派の代表的な人物でもある林希逸と劉克莊を中心として、彼らの文学観と文学活動を分析し、艾軒学派の学術が江湖派詩人に与えた影響を解明することを目的とする。

第一章「福建地域における艾軒学派」では、まず艾軒学派が栄えた福建の莆田と福州との二つの地域を分析し、艾軒学派が生まれた外的要因を具体的に明らかにした。そして、艾軒学派の実像を探るために、各史料における艾軒学派に関する記載を総合的に分析した。また、本章の後半では艾軒学派はなぜ後世において忘却されてしまったのかということについて考察し、その結果従来の説とは違い、艾軒学派の衰退は学派の学問的問題と艾軒学派の弟子たちの学問方向の変転にあることを指摘した。

第二章「艾軒学派における伝承と変転について—思想と文学の面に着目して—」では、艾軒学派の内部における思想と文学理念の継承、及び伝承の過程における変化について詳しく探究した。艾軒学派には文派的性格も備わっていると思われるが、従来文派としての特色については具体的に説明されていない。本章では、艾軒学派の文人たち自らの論述と後世の評論を合わせて考察しながら、艾軒学派の文派的特色を明らかにした。また、艾軒学派における仏教思想の介入、その介入による詩風の変化も詳細に分析した。

第三章「林光朝について—その文学批評を中心に—」では、艾軒学派の開祖である林光朝を紹介し、従来全く注目されていなかった林光朝の文学批評についての考察を行った。さらに、林光朝に対して当時と後世の評価も取り上げ分析した上で、林光朝の文学批評が劉克莊に与えた影響、すなわち劉克莊の「氣」に関する論評は林光朝から得たものであることを解明した。

第四章「艾軒学派と江湖派詩人の林希逸をめぐって」では、まず『宋元学案』と『宋元学案補遺』の儒学者に占める江湖派詩人の割合を調査し統計をとった。次に、艾軒学派に属し江湖派の代表的詩人でもある林希逸を取り上げて、彼及び艾軒学派の開祖・林光朝の「離騷」と「揚雄」評の特色を考察した。これらの分析により、時代風潮に逆らって「道」より「文学」自体の価値をより重視していた艾軒学派の性格も見えてきた。また、林希逸と江湖派詩人との交遊について考察し、彼と江湖派詩人との緊密な繋がりを分析した。あわせて、今までの研究において見逃してきた林希逸と陳鑒之の交遊関係も明らかにした。

第五章「宋代文人「焚稿」試論—劉克莊と林公遇父子と関連して—」では、莆田地域の文人であり、江湖派詩人でもある劉克莊、また彼の義理の父である林豫、林豫の息子である林公遇らの「焚稿」行為に着目し、さらに一歩進んで、宋代文人の「焚稿」活動を総合的に考察した。本章では、宋代文人の「焚稿」行為は、政争と出版以前の編輯及び理学者の詩文への軽視などに繋がることを

明らかにした。

第六章「江湖派における晚唐体詩風—楊万里の影響に着目して—」では、艾軒学派に属し、江湖派詩人でもある劉克莊を中心に、江湖派詩人の晚唐体詩風について考察を行った。江湖派は晚唐体詩風を受容したことは疑いないが、各詩人たちが晚唐体詩風を受け入れた具体的な過程は研究されていない。本章では、劉克莊と姜夔と戴復古の三人の代表的な江湖派詩人を例として、実証的な考察によって、彼らの晚唐体詩風の受容には、南宋の楊万里の影響があることを解明した。つまり、これらの三人は皆楊万里を通して晚唐体詩風に近づき、楊万里の晚唐体に対する認識も大いに受け入れていた。加えて、楊万里と艾軒学派の開祖である林光朝の交遊関係から、艾軒学派の劉克莊と林希逸が楊万里の晚唐体詩風に傾倒したことも分析した。このように、楊万里の影響があることは、従来の研究においては取り上げられることはなく、艾軒学派に視点を据えて江湖派を考察したことによって、初めて浮き彫りにできた特色である。

以上、本論文では文学と哲学の融合という視点から、南宋後期の江湖派に光を当てて考察してきた。福建地域における艾軒学派に着目し、当時の理学派の実像を明らかにした上で、南宋の理学と文学の関係を考えることは、これまでの江湖派研究には見られない新たな視点である。さらに艾軒学派という理学派から江湖派詩人を照射するという本論文の試みは、従来とは異なる角度からの江湖派についての考察であり、今後の江湖派研究に一つの方向性を提示できたと考える。